

日本占領時期の「女聲」雑誌に見る 女性観の研究

— 普及活動の連携形態と課題

段毅琳

1. はじめに

『女聲』雑誌¹（編集長佐藤俊子²・編集者関露³等）は1940年代の日本占領区上海において日本軍の支持下で刊行された雑誌である。本稿では『女聲』雑誌の女性観研究の一環として、1940年代に占領地区北京（北平）で活動していた周作人が『女聲』雑誌に寄稿した「女子と読書」を手掛かりに、『女聲』雑誌の掲載記事（信箱，評論）との女性観比較を通じ、『女聲』雑誌の特色をより一層明らかにしたいと考える。

本論に入る前に、まず『女聲』雑誌，佐藤俊子，関露，周作人及び当時の時代背景について先行研究を踏まえ述べておきたい。

『女聲』雑誌は1942年5月15日に創刊され1945年7月まで発行された月刊誌である。一卷12期，計38期発行された。編集長は日本人の佐藤俊子（中国名は左俊芝），編集者は中国人の関露，凌大焯，趙蘊華である。太平出版公司駐上海日本海軍報道部の支持下で，発行数は毎月4000～5000部と一定の影響力を持っていた。⁴『女聲』雑誌の販売は当初上海だけであったが，1943年2月に太平出版公司から編集室が独立してからは販売経路も南京，蘇州，無錫，揚州，漢口，常州，松江，杭州，嘉興へと拡大した。1943年2月第1巻第10期から編集室の独立に当たり佐藤俊子と太平公司との間でどのような駆け引きがあったかは未だ明らかになっていないが，太平洋公司側は著作権は譲らず編集室だけを独立させた。同雑誌の影響につ

いては、「私たち青年の教室」、「最も密接な友人」等といった読者からの投稿にも窺うことができる。『女聲』雑誌の内容は家庭、社会、文芸、科学、女性問題等に跨る総合雑誌であった。後にも述べるが、『女聲』雑誌最大の特徴は、日本軍管理下の雑誌でありながら、遠く離れた共産党統治区の主流女性観と呼应する文章を掲載していたことである。

佐藤（田村）俊子（1884—1945）は明治時代から大正時代にかけての作家であり、1909年青鞆社に加入し日本文壇で活躍していたが、1918年に恋人であった社会主義運動家の鈴木悦を追いカナダへ渡った。その後、鈴木の影響からカナダで日系移民の女性労働者に対する思想啓蒙を行った。1936年鈴木悦の死により、一旦帰国するも文壇に返り咲くことはなく、1938年12月から中央公論社の特派員として中国に渡り、特派員としての在任期間が過ぎた後も中国に滞在し、1942年から1945年に逝去するまで上海で『女聲』雑誌社の編集長を担当した。

関露（1907-1982）は『女聲』雑誌社の重要な編集者である。1932年共産党に入党、革命運動に参加するとともに、詩歌や小説の創作を行う著名作家でもあった。1942年に党の指示により共産党地下工作員という特殊な身分で『女聲』雑誌社に入り、佐藤俊子の病没後に同雑誌の編集長を担当した。日本軍支持下で働く共産党地下工作員としての複雑な立場にありながら、『女聲』雑誌に130篇に上る文章を発表している。

関露と佐藤俊子の二人は異なる民族、立場であったが、社会主義の影響と女性啓蒙活動の参加という共通点があり、『女聲』雑誌においてお互いに欠かすことのできない存在であった。

周作人（1885-1967）は魯迅の弟で、また新文化運動時期の代表的人物であり、女性解放問題においても重要な啓蒙の役割を果たした。1918年5月15日に与謝野晶子『貞操論』を翻訳発表した。周作人の女性観に関する研究は、五四運動期に集中している。阿莉塔（2002）は、「周作人と与謝野晶子—両者の貞操論をめぐって—」で周作人が与謝野晶子『貞操論』を中国でいち早く翻訳発表した理由を「自分の主張に対する共鳴者を日本で見つけて、それを武器にして当時の中国の女性問題を解決しようとした」とし、周作人のねらいを指摘している。また、范輝（2009）は「二種類の配慮——周作人と蘇青の女性観比較」の中で、伝統的な旧観念対

して周作人が女性解放思想を「性の解放と経済の解放があってこそ真に女性が解放される」と認識していたと述べている。⁵その他にも、韓玲姫（2013）「周作人の女性思想と与謝野晶子の影響：「防淫奇策」から「貞操論」へ」⁶、李瑾（2003）「文学活動初期における周作人の女性観——翻訳小説『侠女奴』を中心に」⁷等があるが、1940年代を中心とした周作人の女性観の研究は少ない。湯麗敏（2007）「周作人の女性観への考査」⁸では五四時期から1950年代までの周作人の女性観を分析している。湯氏は文中で「女子と読書」を挙げているが、「とにかく女性も男性も同じ人間であり、物質的にも精神的にも先ず真の「人」に成長しなければならないのが、与謝野晶子と周作人の共通の認識だ」⁹と指摘するに止まっている。また、王蘭（2005）「女傑賛美から「婦人を哀れむ」へ——周作人の女性論の変遷について」¹⁰では、周作人の女性論を五つの時期に分け¹¹、その変化の軌跡を叙述しており、その中で国民政府と中日戦争期（1928-1945）における周作人の思想の特徴として儒教への回帰を挙げている。

次に本稿の時代背景である1930～40年代の日本軍占領地区及び共産党占領地区の女性解放に関する主流思想を先行研究から見ていく。

1930年代、世界恐慌の発生に伴い中国経済も不況に陥り、世界的に見ると、当時ドイツでは「婦女回家」説が、社会主義ソ連では婦女は「家庭から出るべき」と唱えられていた。中国においては増大する失業者が女性から就業の機会を奪い、また、同時に抗日活動に転化した時期であり、女性の目を就業から「家」に向けるため中国全土で「婦女回家」、「良妻賢母」論争が発生した。30年代北京の主流女性思想「良妻賢母」について、前山加奈子（1993）は「良妻賢母主義は、国家的視点からも、家庭的視点からも、一歩進んだ近代女性論として受け入れられた。しかし、この三〇年代においては、同じ「良妻賢母」が、それとは異なった意味でスローガン化され、女性の人生観、倫理観の基準とされたのであった。つまり、職業を求め、社会的役割を担うことは、良妻賢母たりえない、女は家に居て、良き母、良き妻であるべきだとし、女性を家庭に「閉じ込め」ようにしたのである」¹²と分析し、また呂美頤（2001）は、抗日戦争時期（1937～45）に「日本の占領者は、かつて占領地区で大々的に良妻賢母主義を主張した。しかし、これは日本人の創意ではなく、当時中国にあった良妻

賢母主義の全国的な論争に対して、政治目的を持って行われた選択だった。その種の選択は、日本の対中戦略や、文化政策全体と直接関連していた]¹³と日本軍が政治目的を持って良妻賢母主義を「選択」したと指摘している。

このように1930年代の中国では世界恐慌と戦争に直面する中で、女性を家庭に「閉じ込める」という「良妻賢母」思想や運動が盛んになり、また日本軍の対中戦略政策にも有益であるとして「良妻賢母」思想が占領地区の主流となっていたことがわかる。

しかし、延安の共産党統治区的女性解放思想は、社会主義ソ連の「家庭から出るべき」に呼応していた。江上幸子（1993）は『中国婦女運動的重要文件]¹⁴に基づき、「女性を生産活動に参加させ、生産・消費合作社を組織して、（中略）女性自身の経済的地位を向上させた」、また、『四三年決定』の功として『四三年決定』が經典化していく中で、女性解放には経済的独立が必須という思想の強化に役立ったことが挙げられよう]¹⁵と述べており、1940年代に延安の共産党統治区では女性の経済的独立が重視されていたことがわかる。

2. 周作人と『女聲』雑誌について

本稿で比較対象として取り上げる周作人も日本軍占領地区北平での文筆活動において、自己の思想を表現した。当時北平にいた周作人は上海の女性雑誌『女聲』で二篇の文章を発表した。一つは知堂（周作人）「女子と読書」（『女聲』雑誌第2巻第10期、1943年、4-5頁）、もう一つは知堂（周作人）「佐藤女士の事（原題：佐藤女士的事）」（『女聲』雑誌第4巻第2期、1945年、6-7頁）である。「佐藤女士の事」は佐藤俊子逝去時の追悼文であり、本稿ではその具体的内容には触れない。もう一つの「女子と読書」からは1940年代の周作人の女性観が読み取れる。その文中で周作人は与謝野晶子『一隅より』（1911年、金尾文淵堂版）収録の「雑記帳」を翻訳引用している。そして、翻訳引用について周作人は「明治四十四年の出版、即ち辛亥の年であった。今から三十二年前のことだ」]¹⁶とし、「余暇の時にできるとしたら、極く普通の文章を探しその要約を叙述することである。もともと『一隅より』感想文集の中には二十のテーマがあり、その末尾に

ある「雑記帳」はその総称で長文や短文が多数収録されており、この本全体の半分を占め、300ページ余りある。その中の一つの短文は、人に読書を勧めているものであり、今これを紹介するが、果たして他人の訳文を写したのか、自分で訳したのかは定かではない]¹⁷と述べている。筆者は中国における当時の与謝野晶子作品の翻訳出版状況を調査したが、「雑記帳」の翻訳が出版された形跡はなく、周作人が自ずから翻訳しておいたものと考えられる。

では、なぜ周作人は32年前に翻訳しておいた与謝野晶子「雑記帳」収録の「女子と読書」を1944年の『女聲』雑誌に引用発表したのだろうか。その理由は、「私は民国六年に貞操論という文章を翻訳し、『新青年』に掲載した。今初期の感想文集（「雑記帳」を指す。筆者注）を読み直すと、その中によい議論が少なからずあることがわかる。しかし、それらすべてを翻訳するのは、今すぐにはできないことではない。訳者の怠惰が原因の一つであるが、もう一つの原因は今の時代に合わない文章があるということだ。余暇の時にできるとしたら、極く普通の文章を探し、その要約を叙述することだろう」]¹⁸と述べている。つまり周作人は「雑記帳」から差し障りのない内容を「女子と読書」に引用したことがわかる。

周作人が「女子と読書」に引用した「雑記帳」の内容は、主に家庭にいる女性への読書の勧めによる、女性啓蒙と育児の二点である。

先ず家庭にいる女性について周作人は与謝野晶子「雑記帳」の以下の部分を引用している。以下は周の引用箇所及びそれに対応する「雑記帳」の原文である。（下線は筆者）

周作人「對於現今在家庭裏的青年女性有一件希望的事，便是為得將來可以做得丈夫的伴侶，做得兒女的教師，又使得自己的心賢明聰慧，溫雅開濶，在短的一生理（里，筆者註）享受長的精神上的快樂起見，每日至少要有一小時，就是在晚上把睡眠時間減省下來也好，養成讀書的習慣。」]¹⁹

与謝野晶子「只今の家庭の妻となつて居られる若い御婦人方に望みますことは良人の伴侶となり子供の教師となり又自己の心を賢く聡明し、溫雅快濶にして、短い人生に永い精神上的の楽しみを享受する為に、毎

日せめて一時間は夜分に睡眠時間を割いても読書の習慣を作られたい事です。』²⁰

将来夫の伴侶となり、子女の教師となり、また自身が賢く聡明になるため、読書の習慣を身に付けることを提唱している。また育児については、

周作人「假如真是深愛兒童，父母先自成為賢明，再將兒童養育成賢明的人，那是很切緊的事吧。」²¹

与謝野晶子「子供を眞に深く愛するならば親が先づ賢くなつて子供を賢く育ててやるのが大切でせう」²²

と述べている。

更に、女性の読書は、

周作人「本來女人容易為低級的感情所支配，輕易的流淚，或無謂的生氣，現在憑了硬性的學問，使得理性明確，自不至為卑近的感情所動，又因了高尚的藝術，使得感情清新，於是各人的心始能調整，得到文明婦人的資格，對於夫可為賢妻，對於子可為賢母，在社交界可為男子的好伴侶。」²³

与謝野晶子「元來女は低級な感情に支配され易く，安つばい涙を流したり，埒もないことに腹をたてたりする風があるのですが，硬い學問で理性を確にすれば卑近な感情に動かされる事なく，其上高尚な藝術に由つて更に感情を清新にすれば，茲に初めて各人の心の調整が出來て，立派に文明婦人としての資格が出來，良人に對しては淑妻，子に對しては賢母，社交界にあつては男子の好伴侶となる事が出來るでせう。」²⁴

と硬い本を読むことで，文明社会における婦人として立派な資格ができ，夫や子どもそして社交界において，良き妻であり，母であり，伴侶となることができると述べている。

ここに挙げた三例は周作人が与謝野晶子「雜記帳」より翻訳引用した女

性観である。当時の占領区での主流思想は良妻賢母思想であったことは先に述べたが，周作人は文中で「淑妻」を「賢妻」と翻訳し，更には「賢母」の一語を用いている。一見すると良妻賢母思想を唱えているように誤解を招く可能性があったが，実際には良妻賢母については一言も触れておらず，その言説は女性の性や個の解放を重視した五四時期の女性観と基本的に変化していない。

では，良妻賢母について，周作人はどのように考えていたのだろうか。1940年『新光』雑誌第6期に発表した「女学生への話（原題：女学一席話）」には，「良妻賢母」への考えが表明されている。

まず，良妻賢母について「たとえば世間が言うように良妻賢母が平穩な主張であるとしたら，そうなった時に私はそれを讚えることはできない。それはなぜか。理由は二つある。一つは，何をもって良妻賢母とするのか私にはわからないからだ。一つのことを論じるには種々の異なる標準があり，時と場所によってもそれぞれ異なっている。」²⁵と良妻賢母には基準がないと述べている。二つ目は，男女平等の観点から「何をもって賢夫良父とするか，これについてもよく分からない。多くのことは対応しているもので，女性に良妻賢母になれというのなら，対照的なものにすべきであり，男性にもどのように良夫賢父になるのかを尋ねないわけにはいかない。しかし，これについても私はわからないし，恐らく他人も私よりよく知っているということはないであろう」²⁶，更には「一言でいうなら，良妻賢母は事なかれ主義だといえるし，まるく言えば，新旧どちらでもよいといえるが私はこれにも難しいところがあり，どこからも手を付けられない。ただ謝して辞するだけだ」²⁷，「現在男子の職業にはまだ問題があり，大学卒業生の進路は役人になるか，雑誌を発行するか，教員になるかの数種類である。（中略）今の女性の職業に至っては，われわれのような門外漢はどこから手を付ければいいのか分からない」²⁸，「しかし現在の中国の家庭と市場はやはり旧体制が組織したもの」²⁹であり，主婦が仕事で得る収入と家庭内で人手不足により人を雇う費用を計算すると金銭的にはほぼ変わらない。よって「現在女性は教育を求めているが，それを職業から考えるべきではない」³⁰と述べている。少々長い引用であるが，ここからいくつかのことが分かる。一つは，周作人は「良妻賢母」には基準がないと考え、

「良妻賢母」があるのなら、それに対応する「賢夫良父」もあるはずだと、その存在自体に疑問を呈し「良妻賢母」を遠ざけていること。そして二つ目に当時の社会や根強く残る伝統思想や市場等を鑑み、女性の就職は困難があり、また有利ではないとし、「性の解放と経済の解放」の二つが揃ってこそ真の女性解放であると考えていた周作人ではあったが、この時期、女性の就職に対しては消極的な態度を表していた。

先行研究では1940年代の周作人の女性観について「儒教への回帰」、「伝統への回帰」をその特徴として指摘しているが、『女聲』雑誌で発表した「女子と読書」の内容は、北京の『新光』誌上で伝統文化から女性観を再評価したのとは異なり、かつて五四時期に取り上げた与謝野晶子を再度引用し、自己の思想を表現した。このことは「女子と読書」の特殊性であり、周作人の女性観の変化を語る上で欠かすことのできない文章といえる。

1940年代の周作人の女性観は北京で主流であった良妻賢母について疑問を呈しており、五四時期と変わらずに家庭内女性の啓蒙を主とし、その内容は正に32年前に翻訳しておいた与謝野晶子の文章と通じるところがあったので「女子と読書」において与謝野晶子「雑記帳」から引用し、自身の女性観として寄稿したのである。

このような思想構造を含んだ「女子と読書」を『女聲』雑誌はどのように受け止めたのであろうか。以下に分析を加えていきたい。

3. 「女子と読書」に対する反響と関露の女性観

周作人「女子と読書」に対する反響はどのようなものがあったのだろうか。結論から述べるとまったく何も反響がなかったといえる。『女聲』雑誌では、一般的に重要な作者や寄稿された文章に対してコメントを付す。例えば、周作人が佐藤俊子の追悼文「佐藤女士の事」を寄稿した時には、「周氏の「佐藤女士の事」の意義は単なる追悼文ではなく、佐藤女士の短い歴史だといえる。読者たちが最近逝去した一人の日本人女性作家について知ることができるように、私たちはここに特別に掲載する。そして同時に、ここで周作人氏に深く感謝の意を表します。」³¹と、当時編集長であった関露は周作人に対して高く評価し、深い尊敬と謝辞を表している。しか

も周作人ほどの著名な文化人であれば、その他の雑誌に寄稿した際も、何らかの形でコメントされるのが通例である。しかし「女子と読書」に対しては一切コメントがされていない。また、「女性と読書」の直後に、芳君（関露）「節約と青年婦女」（原題：節約と青年婦女（『女聲』1944年第2巻第10期6-7頁）が掲載されており、周作人の女性観と違う視点からアプローチしている。

芳君（関露）は文中で「混乱した特殊な時期に」女性の節約問題を論じ、その視点は主に労働女性と職業女性に向けられた。「都市部において、女性たちはずっと辛抱強さと苦勞に耐えて努力するという中国固有の道徳を守っています。貧しい女性たちも農村の女性たちと同様に、家庭主婦と一般人としての仕事を兼ねています。彼女たちは育児や炊事洗濯をするだけでは無く、なおかつ裁縫や編み物等の仕事をする事で夫の生産を助けます。裕福な家庭の女性は刺繍等の仕事に携わっています」³²と家事、育児そして仕事を兼ねている女性たちに注目し、また「一般的に就業しているか、あるいは失業中の女性と労働女性、中流以下の家庭の女性は、その生活はやはり旧来の風習を守り、生産に従事し儉約して質素であり、勤勞である」³³と社会生産に携わる女性または中流以下の家庭女性を対象として論じている。

その他にも芳君（関露）は『結婚後の婦女と社会の関係（原題：結婚以後的婦女與社會的關係）』等においても家庭女性に対して以下のように提唱している。

結婚後の女性に対して、「結婚の後に彼女たちは完全に変わった。家庭の雑事や子どもの養育は彼女たちを素早く社会生活から家庭内へと転向させ、終には世間と隔絶した」³⁴と述べ、その対策として、「より肝心なことは彼女たちに正確な心理的な建設を加えることだ。この心理的な建設とは簡単に言えば、彼女たちの心に一種の生活に対する自覚をさせることであり、自己と社会と間の相互関係を悟ることだ」³⁵としている。そして「どのような女性であっても、妻であり母であるかもしれないが、それらは個人の任務にすぎず、個人の任務以上に高いレベルのものがある。それは彼女と彼女の家庭が身を寄せているその社会だ」³⁶と女性の家庭での役割よりも社会性を強調した。

このように、関露は労働女性、特に中下層の女性に目を向けて女性と社会への責任を強調しており、それは周作人の家庭の女性啓蒙思想とは異なる視点を持っていると考えられる。周作人は家庭婦人に対して「賢く」なるべきと啓蒙としたが、比較すると関露は全ての女性を対象にし、より女性の「社会生産」参加を重視していたことが分かった。そしてそれは先に挙げた共産党地区の主流女性観と非常に近いといえる。

4. 「信箱」欄(投稿欄)から見る『女聲』雑誌の女性観

最後に『女聲』雑誌を代表する「信箱」欄(投稿欄)から『女聲』雑誌の女性観を見ていく。

「信箱」欄については会田綱雄の回想録に詳しく、「この雑誌で人気があったのは、田村さん自身が回答者になっていた人生相談の「信箱」という欄だった。田村さんは左俊芝という中国名をつかっていたが、かんじんの中国語はできない。カナダジこみの英語で彼女が回答を口述して、助手の若い中国人が手際よく翻訳していたわけである」³⁷とある。佐藤俊子の中国語能力に関して、会田綱雄は「できない」と述べているが、徐静波(2013)『近代日本文化人と上海』は室伏高信の娘「室伏クララが翻訳していた」³⁸としており、また塗曉華(2013)『上海淪陥時期「女聲」雑誌研究』では「田村俊子はずっと中国語を学んでおり、彼女が訪中したばかりの時に発表した文章の中で中国語の家庭教師がいたことを記している。また、凌大嶸の追憶では、『女聲』の大小様々なことは全て田村俊子が決定し、原稿も最終的には田村俊子がチェックをする。田村は簡単な中国語しか話せなかったが、中国語の閲読はほとんど問題がなかった」³⁹と記しており、田村俊子の中国語閲読力は少なくともある程度はあったと考えられる。会田の回想から二つの重要な事実がわかる。一つは「信箱」欄への投稿に対して佐藤俊子自身が内容を考えて返事をしていたこと。もう一つは「信箱」欄が雑誌の中で人気があったことである。「信箱」欄は読者との直接の対話の場であった。1942年から逝去するまでの三年余りの間、佐藤俊子は『女聲』雑誌の運営に没頭していたようで、現在までにこの期間におけるその他雑誌への寄稿は見つかっていない。よって「信箱」欄は佐藤

最晩年の女性観が最もよく体现されているといえる。

投稿欄を具体的に見ていく前に、『女聲』雑誌全体における女性関係文章の欄目及びその割合について確認しておきたい。劉英順(翻訳)「田村俊子主宰『女聲』の総目次」収録の「雑誌『女聲』の総比率」⁴⁰によると、『女聲』雑誌全体において女性関係の文章はわずか38%で、その他は62%とある。また、各欄目の割合は以下の通りである。

欄目名	女性関係文章	その他
評論	65%	35%
世界の知識	41%	59%
修養	78%	22%
見聞	14%	86%
衛生	52%	48%
娯楽	0%	100%
文藝	47%	53%
家政	27%	73%
映画と芝居	30%	70%
児童	0%	00%
美容	100%	0%
漫画	87%	13%
生活と感想	33%	67%

図版1 「雑誌『女聲』の総比率」
(劉英順(翻訳)「田村俊子主宰『女聲』の総目次」収録「雑誌『女聲』の総比率」を基に筆者作成)

このように『女聲』雑誌は女性雑誌と位置付けられているが、かなりバランスのとれた総合雑誌のような紙面構成となっていることがわかる。その中で、読者の反響が最も見えるのは、読者と直接やりとりをした「信箱」欄であり、「信箱」欄を読み解くと185件の読者投稿の内訳は、婚姻及び男女関係の問題は約50%と半数を占め、また女性の職業と経済的独立については約20%、その他は児童問題や病気等の内容が約30%となっている。経済的独立が占める割合は多くはないが、女性の職業、婚姻及び両性問題について回答する際には、解決の方法として何度も経済的な独立について語っている。ここには佐藤俊子が熱心に読者に返信している姿が見え、関露が執筆した評論欄と同様に、『女聲』雑誌の女性思想が集中して体现されている。

次に投稿欄を具体的に見ていく。まず一つ目は、伝統思想への反抗についてである。投稿者は15歳の女性で「頑固な母親」が勝手に見知らぬ男性との婚約を決めてしまったというものである。そして投稿者は、「自分

のように幼く、見識に欠けている者が、良妻賢母になれと言われても、きっと幸せな結果にならないとわかっている（中略）私は反抗をするべきだが、礼教、封建、専制のスローガンの下で、どのように口を開けといたのでしょうか⁴¹と相談している。それに対する『女聲』雑誌（佐藤俊子）の回答は「あなたはできるだけ徹底的に反抗をするべき⁴²であり、「あなたは母に引き続き学校に行けるように要求するべきだ、少なくとも将来あなたが独立できるくらいの技能を身につけるべきだ⁴³と回答している。また、女性の価値について別の投稿者に対する回答には「女性は家庭の人ではなく、社会の人である。（中略）目を家庭から社会に向けていくべきだ⁴⁴と明確に述べている。佐藤俊子は女性と社会のつながりを重視し、経済的にも独立できるような技術を身に付けることが大切だと説いている。

二つ目は、女性と職業についてである。投稿者は醜業に就く女性で、戦争のために家庭が崩壊し、生きるために仕方なく世間から賤しいといわれる仕事に就いているとある。

「六年前に私には素晴らしい家庭がありました。（中略）しかし、私の家庭は戦火を浴び壊滅し、私の一生も破壊されました。父は砲火の中で亡くなり、兄も失踪し今も音沙汰がありません。母は砲火により体が不自由になり、私の弟妹たちはみな涙の中で日々を過ごしています。みな体が不自由な者や幼い子供で、少しの生産活動もできません。親友から借金をしましたが、長い時間が経ち白い目で見られるようになりました。去年、私は一家のために自身の幸せを犠牲にして、接客婦になり、またダンスホールのダンサーもやり、そのため淫売をする人間になり、社会から軽視されるいやしい人間となりました。しかし私はあがいて、この状況から抜け出さねばなりません⁴⁵と述べており、この女性の苦悩について佐藤は次のように回答している。

「私たちは非常にあなたに同情し、尊敬します。あなたは一般の人からは墮落して軽視される女性かもしれませんが、あなたは多くの人たちが及ばない高尚で純潔な魂、そして光に向かっていく勇敢な心があります。今の状況は決してあなたの誤りではありません。あなたは虚栄心でもなく、享楽でもなく、生活に迫られ生存のために戦っている。

私たちはあなたの苦しみわかります。そしてあなたが良い道へいけるように手助けしたいと思います。しかし現在の状況ではとても難しく、上海にはいくつかの無料の補習学校がありますが、それは労働者の子供と女工のためのものです。私たちはあなたに会いたいと思います。あなたと直接話をしたい、そうすれば何か当座の方法が思いつかうかもしれません。同時に私たちはあなたの境遇は普通ではなく、生活経験も豊富ですから、あなたと話すことは私たちにとっても意義があります。私たちに住所を教えてくださいませんか⁴⁶

このように戦時下の混乱した時代にやむなく醜業に従事している社会の最下層の女性たちに目を向け、深い同情を表すとともに、切実に手助けを申し出、そこから抜け出すための方法を共に考えようと回答している。

また、生産に携わる女性の重要性について上述したように、「接客婦」や「ダンスホールのダンサー」といった身体を用いた仕事をしている女性に対しては、「娼婦たちは社会において可哀そうな女性であるが、彼女たちの職業はただ人に消費されるだけであり、社会生産とは関係がない。⁴⁷と接客婦のような職業に従事する女性に対して同情を表しているが、このような社会生産に参画できない職業については提唱することをせず、女性の職業は社会生産と関係を持つべきだとした。『女聲』雑誌は女性問題の主要な対象は「生産に携わる女性、即ち農村女性、女工、女性教員、女性職員さらにはその他の労働に従事する（頭脳労働と肉體労働）女性であり、彼女たちこそ社会の中核であり、彼女たちがいなければ、社会全体の生産、民生全体の問題と文化教育に影響を及ぼす⁴⁸と述べ、「社会に利益をもたらす女性たち⁴⁹をより重視した。

また、掲載欄目の50%を占める女性たちの婚姻、男女関係及び就学、個人の前途等の様々な苦悩に対して、『女聲』雑誌は女性自身が自立できる技能を学ぶことを提唱し、女性を社会生産に参加する労働者へと導いた。女性の社会生産に参画という点で共産党の延安地区の女性観と呼応しており、同時に『女聲』雑誌は「結婚と社会での就業はいずれも欠かすことのできない事」と女性の家庭「内」と「外」の社会の両面性を挙げているものの、「前者は自然の規律に任せ、後者は社会が構想するべきものだ。な

ぜなら、女性は社会国家の一部であり、独立した事業と活動をするべきだからである。しかし、現在の社会においてはこの二つは常に衝突し、一方が他方を阻害するのである³⁰と女性と社会、国家の関係及び衝突を示している。この衝突について「私たちは問題を二つの方面に分けて考えます。一つは社会職業から、もう一つは家庭制度から³¹とし、その解決方法として「ただ一つの方法がある。一方で学ぶことに努力して、自分に一種の良い成果を持たせること。——なぜなら、特殊な職能を持つ人は容易に社会で努力することができる。——その次にあなたを理解し、尊重し、あなたの社会活動を援助してくれる夫を探すことです³²と女性と社会の問題はまず女性自身の「労働」への進出から解決しようと、家庭の「内」よりも「外」での活動を重視するとともに、男性が女性の社会参加に協力することも求めている。

占領時期の「良妻賢母」思想の下で、周作人は社会状況を鑑み男女平等という視点から女性啓蒙を行ない「性の解放」をより優先させたことに比して『女聲』雑誌は社会と家庭制度の両面を掲げたものの、より女性の社会性を強調した。

5. おわりに

本稿では『女声』雑誌と同じく日本占領区北平にあった周作人の女性観との比較を通して、周作人が1940年代に占領地区の主流女性観と異なる五四時期と変わらない自身の見解を与謝野晶子の引用を通じて表していたことを指摘できた。

1935年以降、共産党の革命地となった延安で、女性を戦争と生産に動員することが中心的課題となっていた。特に「四三年決定」は「生産を排他的に強調」し、家庭改革や女性の権利問題を「二次的」として「すっかり欠落させ」たとする³³ものであり、家庭改革や女性の権利問題よりも女性の生産への参加を強調していた。そして『女聲』雑誌の「女性は社会職業に従事し、経済的にも自立するべき」であり、「女性は家庭内ではなく、社会の人」と提唱した女性思想は共産党占領地区の女性思想と呼応するような内容であった。

『女聲』雑誌が周作人「女子と読書」に何のコメントもせず冷淡に接したのは、良妻賢母の主張と誤解される用語があっただけでなく、おそらく当時の『女聲』雑誌が女性性の解放にまで目を向ける余裕がなく、女性の社会参加に重点が置かれていたからだと考えられる。

ところで、日本占領区上海における厳しい言論統制の中で、『女聲』雑誌がこのような共産党系の主張に類似した内容の雑誌を作れたのはなぜなのだろうか。

ここには当然のことながら、佐藤と関露の軍部とのやりとりや工夫、これまでの女性解放へ取り組む姿勢が影響していると考えられる。

1940年代に『女聲』雑誌と同じく日本の出資を受けていた「文友」雑誌には、『女聲』雑誌に関する記述が二か所ある。漱六(1944)「近七年来の上海雑誌事業について(下)」では『女聲』雑誌を「婦女家庭類」刊行物の代表と位置付け³⁴、もう一つの魯茜「三論」では、「婚姻についての問題ばかりだ³⁵という批判を加えている。

「婦女家庭類」に分類しているのは的を射ているが、魯茜が『女聲』雑誌について結婚等のことばかりだと非難した論調は的外れだといえる。なぜなら、『女聲』雑誌はすでに図版1に示したように女性問題に関しても、結婚問題だけでなく、女性と家庭、職業など多方面から論じていたからである。

また、雑誌全体のバランスから考えると、表面的にはバラエティに富んだ総合雑誌の形を取っている。しかし、実際に読者の反響が一番よく分かる信箱欄を見ると女性問題が大半を占め、女性の労働問題に重点がおかれていたことがわかった。関露も「評論欄」で65%も女性問題について論じており、信箱欄はその補強の働きをしていたと考えられる。総合雑誌のように紙面を工夫することで、軍部の干渉を躲した可能性が高い。つまり、日本軍占領地区においてダイレクトに共産党占領地区と呼応するような、女性の独立を提唱することができなかったため、総合雑誌という体裁を取り、表面的に内容をカモフラージュしていたとは考えられないだろうか。今後の課題は、『女聲』雑誌の具体的な内容にどのような工夫がなされているかを、①戦略としての紙面編集の面から具体的に検討し、また②共産党地区延安で排除されていた「家庭の和睦」について『女聲』ではどう対

応しているのか、更には③『女聲』雑誌の主張の特色をより明らかにするために、佐藤俊子と関露の『女聲』雑誌が発刊される以前の動きを整理していきたいと考える。

参考文献

日本語文献

- 吉屋信子(1962)「上海から帰らぬ人 田村俊子と私『自伝的女流文壇史』, 中央公論社
- 会田綱雄(1972)「一つの回想」(現代詩手帖 15 (10), 思潮社)
- 丸岡秀子(1977)『田村俊子とわたし』ドスメ出版
- 渡辺澄子(1988)「田村俊子の『女声』について」(『文学』, 岩波書店)
- 渡辺澄子(1988)「資料紹介 佐藤(田村)俊子と『女声』」(『昭和文学研究』第17集)
- 渡辺澄子(1989)「資料紹介 続佐藤(田村)俊子と『女声』」(『昭和文学研究』第18集)
- 渡辺澄子(1989)「資料『女声』総目次」(『大東文化大学紀要(人文科学)第二十七号』(中国語版))
- 渡辺澄子(1998)『日本近代女性文学論 闇を拓く』, 世界思想社
- 前山加奈子(1991)「雑誌『女聲』と関露—フェミニズムの見地からの再評価」(『中国女性史研究』第3号)
- 前山加奈子(1993)「林語堂と「婦女回家」論争——一九三〇年代に於ける女性論」『中国の伝統社会と家族』汲古書院
- 江上幸子(1993)「抗戦期の辺区における中国共産党の女性運動とその方針転換——雑誌『中国婦女』を中心に」『中国の伝統社会と家族』汲古書院
- 阿莉塔(2002)「周作人と謝野晶子—両者の貞操論をめぐって—」九六日文2002年8号
- 呉佩珍(2002)「上海時代(一九四二—五)の佐藤(田村)俊子と中国女性作家関露—中国語女性雑誌『女声』をめぐって」(『比較文学』第45号, 日本比較文学会)
- 江上幸子(2003)「毛沢東の「新中国」における「人民・家庭・女性」——丁玲の「夜」再読」, 『ペンをとる女性たち』, 翰林書房
- 白水紀子(2003)「中国における「近代家族」の形成——女性の国民化と二重役割の歴史——」(『横浜国立大学人間科学部紀要II(人文科学)No.6』)
- 呉佩珍(2004)「太平洋を越える「新しい女」——田村(佐藤)俊子にみるジェンダー人種 階級——」(筑波大学博士学位論文)
- 劉英順 訳(2004)「田村俊子主宰『女声』の総目次(翻訳)」(『国文目白』)(日本語版)
- 岸陽子(2004)『中国知識人の百年』早稲田大学出版社
- 『中国女性の一〇〇年』(2004)中国女性史研究会 編 青木書店
- 藤井敦子(2006)「日中戦争延安における女性言説: 雑誌『中国婦女』を中心に」(慶応義塾大学文学会)
- 岸陽子(2007)「『女聲』創刊号に秘められたメッセージ」『植民地文化研究』植民地文化研究会6号
- 末次玲子(2009)『二〇世紀中国女性史』青木書店

- 王紅(2013)「佐藤俊子の一九三九——日本から中国へ」『上海一〇〇年』勉誠出版
- 劉建輝(2013)「日本占領下の上海文壇——田村俊子の足跡を中心に」『上海一〇〇年』勉誠出版
- 小平麻衣子(2014)「佐藤(田村)俊子「中支で私の親た部分(警備, 治安, 文化)」について」(『研究紀要』第八十七号, 日本大学文理学部人文科学研究所)
- 山本秀也(2015)「関露伝(上)(下)」(『世界』)
- 山崎真紀子著, 周珊珊(訳)(2015, 2016)「田村(佐藤)俊子における『女声』——信箱「余声」を中心に(上)(下)」(『札幌大学総合研究』7号, 8号)
- 山崎真紀子(2016)「田村俊子から左俊芝へ——『女声』における信箱から見えてくるもの」(日本上海史研究会, 中日文化協会研究会主催, 2016年5月7日発表)

中国語文献

- 丁言昭(1989)『諜海才女』, 北方婦女兒童出版社
- 呂芳上(1994)「抗戦时期的女権論辯」『近代中国婦女史研究』第2期
- 劉麗威(1995)「淺析近代中国 關於賢妻良母主義的爭論」『婦女研究論叢』5号
- 柯興(1999)『魂歸京都—関露伝』, 群衆出版
- 丁言昭(2001)『関露啊関露』, 人民文学出版社
- 呂美頤(2001)「抗日戦争時期華北淪陷区關於賢妻良母主義的論争」(『殖民地時期女性史第二回研究会・報告原稿』, 東アジア近代女性史研究会, 2001年3月13, 14日)
- 劉麗威(2001)「關於賢妻良母主義的論争」(『婦女研究論叢』, 第3期, 總第40期)
- 夏榮(2004)「20世界30年代中期關於“婦女回家”與“賢妻良母”的論争」華南師範 大學學報(社会科学版)第6期
- 塗曉華(2005)「上海淪陷時期『女聲』雜誌的歷史考察」(『中國現代當代文學研究』)
- 鐘叔河編訂(2009)『周作人散文全集』, 廣西師範大學出版社
- [米]黃心村著, 胡靜(訳)(2010)『亂世書寫 張愛玲與淪陷時期上海文學通俗文化』, 上海三聯書店
- 孟悅, 戴錦華(2010)『浮出歷史地表—現代婦女文學研究』, 中國人民大學出版社
- 塗曉華(2013)「上海淪陷時期『女聲』雜誌研究」, 中國傳媒大學出版社
- 陳雁(2014)『性別與戰爭 上海 1932 ~ 1945』社会科学文獻出版社
- 徐靜波(2015)「作家佐藤俊子的上海歲月」復旦大學日本研究中心「日語學習與研究」第五期總180号
- 徐仲佳(2016)「西學與傳統之間的轉換 ——周作人現代性愛思想探源」『中國現代, 當代文學研究』上海人民出版社

- 『女聲』雑誌についての研究の嚆矢は渡辺澄子(1988)「資料紹介 佐藤(田村)俊子と『女聲』」であり、近十年来には呉佩珍(2004)「太平洋を越える『新しい女』——田村(佐藤)俊子にみるジェンダー人種・階級」、塗曉華(2013)『上海淪陷時期『女聲』雑誌研究』が『『女聲』雑誌がどのように新女性の理想を实践したのか』について系統的な研究を行っており、山崎真紀子、周珊珊(訳)(2016)は『女聲』雑誌の欄目に目を向け「田村(佐藤)俊子における『女声』——信箱「余声」を中心に」を叙述している。
- 佐藤俊子についての研究は、田村俊子として大正時代に日本文壇で発表した文章の作品論研究が多いが、本研究に關係する佐藤俊子研究は上記の他に、王紅(2013)「佐藤俊子の一九三九——日本から中国へ」『上海一〇〇年』、呉佩珍(2002)「上海時代(一九四二—一五)の佐藤(田村)俊子と中国女性作家閔露—中国語女性雑誌『女声』をめぐって」、吉屋信子(1962)「上海から帰らぬ人 田村俊子と私」『自伝的女流文壇史』、山崎真紀子(2016)「田村俊子から左俊芝へ——『女聲』における信箱から見えてくるもの」、渡辺澄子(1989)「資料紹介 続佐藤(田村)俊子と『女声』」、劉建輝(2013)「日本占領下の上海文壇——田村俊子の足跡を中心に」『上海一〇〇年』、徐靜波(2015)「作家佐藤俊子の上海歲月」等が挙げられる。また、近年発表された小平麻衣子(2014)「佐藤(田村)俊子『中文で私の観た部分(警備、治安、文化)について』は、現在までほとんど明らかになっていない佐藤俊子の北京での特派員時代の一部を知ることができる資料である。
- 閔露についての研究は1980年代の丁言昭(1989)『諜海才女』等から始まるが、以前はスパイとしての一面が大きく取り上げられていた。1990年代からは柯興(1999)『魂帰京都一閔露伝』、丁言昭(2001)『閔露啊閔露』等の伝記が出版され、近年王茜妮(2011)「閔露在『女聲』中の言論研究」、劉人鋒(2012)「論閔露作品中的女性意識」、丁曉萍(2015)「女性・革命與文學——女作家閔露的生命軌跡淺議」等の閔露のフェミニズム思想に注目した研究が行われている。
- 『女声』雑誌の販売部数について、塗曉華は丁景唐の回想及び関連資料から「一般的に4000から5000部」と結論付けている。(塗曉華「上海淪陷時期『女聲』雑誌の歴史考察」、『中国現代文学研究叢刊』第三期, 2005, p.89)
- 范輝「兩種閔露——周作人と蘇青女性觀之比較」、『名作欣賞』14号, 2009, p.63
- 韓玲姬「周作人の女性思想と与謝野晶子の影響:『防淫奇策』から「貞操論」へ」『國際文化表現研究9号』, 2013, p.52
- 李瑾「文学活動初期における周作人の女性觀—翻譯小説『侠女奴』を中心に」『中京学院大学研究紀要10号』, 2003, p.182
- 湯麗敏「周作人の女性觀への考査」、『國際教養学部紀要VOL.3』2007, p.66-73
- 湯麗敏「周作人の女性觀への考査」、『國際教養学部紀要VOL.3』2007, p.69
- 王蘭「女傑贊美から「婦人を哀れむ」へ 周作人の女性論の變遷について」『中国女性史研究(14)』2005, p.11-24
- 王蘭「女傑贊美から「婦人を哀れむ」へ 周作人の女性論の變遷について」『中国女性史研究(14)』2005, p.11
- 前山加奈子「林語堂と『婦女.回家』論争——一九三〇年代における女性論」『汲古書院』, 1993, p.518
- 原文「抗日戰爭時期日本占領者曾在淪陷區大肆宣傳與推行賢妻良母主義, 其实, 這並非是日本人的創舉, 而只是對中國正在進行的關於賢妻良母主義的全國性論争, 帶有政治目的的選擇, 這種選擇與日本對華的總戰略, 總的文化政策直接相關。」呂美頤「抗日戰爭時期華北淪陷區關於賢妻良母主義的論争」『殖民地時期女性史第二回研究

会・報告原稿』, 東アジア近代女性史研究会, 2001年3月13, 14日

- 『中国婦女運動的重要文件』中華全國民主婦女聯合会宣傳教育部, 人民出版社, 1953年
- 江上幸子「抗戰期の辺区における共産党の女性運動とその方針転換——雑誌『中国婦女』を中心に——」『中国の伝統社会と家族』汲古書院, 1993, p.540
- 原文「係明治四十四年出版, 即是辛亥那一年, 已是三十二年前事了」知堂(周作人)「女子與讀書」, 『女聲』第二卷第十期, 女聲雜誌社, 1943, p.4-5
- 原文「餘下來可做的事, 是找一篇平常點的文章, 摘要叙述, 以見一斑。原来這一冊「從角落裏」的感想集裏列著二十題目, 唯末尾的「雜記帳」一目實在乃是總名, 收容長短文章甚多, 佔全書分量之半, 約有三百餘葉。其中有一短篇, 是動人讀書的, 現在便介紹過來, 也說不清是抄是譯了。」(同上)
- 原文「我在民國六年譯過一篇論貞操的文章, 登載「新青年」上, 至今重閱最早的感想集, 裏邊好議論還是不少, 但是要想整篇的翻譯, 卻又(又, 筆者注)一時不易做到。譯者的懶是一個原因, 其次是文章也就是不合時事。餘下來可做的事, 是找一篇平常點的文章, 摘要叙述, 以見一斑。」(同上)
- 知堂(周作人)「女子與讀書」, 『女聲』第二卷第十期, 女聲雜誌社, 1943, p.4-5
- 与謝野晶子, 「一隅より」, 金尾文淵堂版出版, 1911, p.517
- 知堂(周作人)「女子與讀書」, 『女聲』第二卷第十期, 女聲雜誌社, 1943, p.4-5.
- 与謝野晶子, 「一隅より」, 金尾文淵堂版出版, 1911, p.521
- 知堂(周作人), 「女子與讀書」, 『女聲』第二卷第十期, 1943, 女聲雜誌社, p4-5.
- 与謝野晶子, 「一隅より」, 金尾文淵堂版出版, 1911, p.565
- 原文「如世間所云, 賢妻良母, 當是平穩的主張, 到那時鄙人不能贊一辭。為什麼呢? 這有兩種理由。其一如何是賢妻良母, 我不能知道。論一件事情可以有種種不同的標準, 因時地而異」周作人「女學一席話」, 『新光抄』(五), 1940年6月初出, 葉堂雜文『周作人散文全集』第八卷, 廣西師範大學出版社, 2009, p.495
- 原文「如何是賢夫良父, 這又是不明白的事。許多事情都是對應的, 要想叫女人作賢妻良母, 對於男子方面也不得不問一聲, 怎樣是賢夫良父, 以便對照設計。可是這個不但我不知道, 恐怕別人也都不比我懂得多」(同注25)
- 原文「總結一句話, 賢妻良母, 雖是四平八穩的主義, 講得圓到一點可以新舊鹹宜, 可是我覺得有這些難處, 所以無法著手, 只好敬謝不敏了」(同注25)
- 原文「現在男子的職業還成問題, 大學畢業的出路只有做官, 辦報, 教書這幾種(中略)此刻來為婦女話職業, 我們外行實在覺得無從下手」(同注25)
- 原文「但是現今中國的家庭與市場都還是旧式組織的」周作人「女學一席話」, 『新光抄』(五), 1940年6月初出, 葉堂雜文『周作人散文全集』第八卷, 廣西師範大學出版社, 2009, p.496
- 原文「現在女子求教育, 不可從職業著想」周作人「女學一席話」『新光抄』(五), 1940年6月初出, 葉堂雜文『周作人散文全集』第八卷, 廣西師範大學出版社, 2009年, p.496
- 原文「周先生的『佐藤女士的事』這篇文章意義也並不只是追悼, 可以說是一篇佐藤女士短短的歷史, 所以我們現在特別刊登出來, 使讀者們可以了解一位新近故去的日本女作家, 同時我們在這裏向周作人先生深深致謝!」閔露『女聲』第4卷第2期, 女聲雜誌社, 1945, p.37
- 原文「在城市裏, 婦女們一向也是守著中國固有的道德, 堅忍和勤苦。貧窮的婦女們也像農村婦女一樣, 兼有家主婦和一般人底工作。她們不但撫育孩童, 炊爨和洗滌, 並且選用縫紉和編織類的工作去幫助丈夫的生產。富有家庭的婦女就從事刺繡類

- 的女紅。」芳君（閔露）「節約和青年婦女」，《女聲》第2卷第10期，女聲雜誌社，1944，p.6
33. 原文「一般在業或失業的婦女，勞工婦女，和中等以下的家庭婦女，她們的生活還是保守著舊來的風俗，她們從事生產，儉樸而勤勞」芳君（閔露）「節約和青年婦女」《女聲》第2卷第10期，女聲雜誌社，1944，p.7
34. 原文「到了結婚以後她們就完全變了，家庭雜物與兒童的養育使她們迅速地從社會生活轉向家庭中去，終於就與世隔絕了」芳君（閔露）「結婚以後的婦女與社會的關係」，《女聲》雜誌第1卷7期，女聲雜誌社，1942，p.2-3
35. 原文「更要緊的是給她們加一種正確的心理的建設。這種心理的建設，簡單地說來，就是要使她們在心理上起一種生活的自覺，要覺悟自己與社會之間的相互關係」芳君（閔露）「結婚以後的婦女與社會的關係」《女聲》雜誌第1卷7期，女聲雜誌社，1942，p.3
36. 原文「不管是什麼樣的婦女，也許是人的妻子，也許是人的母親，妻子與母親只是她私人的任務，在私人的任務以上還有一個更高的東西，那就是她與她的家庭所寄托的那個社會」芳君（閔露）「結婚以後的婦女與社會的關係」，《女聲》雜誌第1卷7期，女聲雜誌社，1942，p.2-3
37. 会田綱雄「一つの回想」《現代詩手帖》15（10），思潮社，1972，p.132
38. 徐靜波《近代日本文化人與上海》上海人民出版社，2013，p.224
39. 原文「田村俊子一直在學習中文，她曾經在剛到中國時發表的文章中提到她的中文家庭教師，另外根據後大嶸回憶，《女聲》的大小事務都由田村俊子決定，稿子最後都由田村俊子審稿，田村雖然只會說一些簡單的中國話，但是她閱讀中文幾乎沒有問題」塗曉華《上海淪陷時期「女聲」雜誌研究》，中國傳媒大學出版社，2013，p.92
40. 劉英順（翻譯）「田村俊子主宰『女聲』の総目次」，《国文目白》43，2004，p.97-132
41. 原文「這樣年幼而無見識的人，去做一個「賢妻良母」知道一定得不到美滿的結果（中略）我要起來反抗，但是在禮教，封建，專制的口號下，叫我怎能啓口呢？」「信箱欄目」，《女聲》第1卷7期，女聲雜誌社，1942，p.47
42. 原文「妳一定要盡量的反抗到底」「信箱欄目」，《女聲》，女聲雜誌社，第1卷7期，1942
43. 原文「妳要向妳母親竭力要求，讓妳繼續入學，至少要完成妳將來能夠獨立的一種技能」「信箱欄目」，《女聲》，女聲雜誌社第1卷7期，1942，p.47
44. 原文「女人不是家庭裏的人，而是社會的人（中略）把眼光從家庭放開到社會去」「信箱欄目」，《女聲》，女聲雜誌社第3卷9期，1944，p.82
45. 原文「當在六年前的時候，我也有一個美滿的家庭，（中略）可是我美滿的家庭受炮火的洗禮，而毀滅了，也把我的一生毀滅了。我的夫親就在炮火中長逝，我的哥哥也在炮火中失了，至今還是音訊杳然，我母親也在炮火中成了殘廢的人，遺下來祇有我的弟妹等都在眼淚中過日子，全是殘的幼的，絲毫不能生產，向親友處貸借，日積月累，終於得到人家白眼。當去年的年日，我為了一家的生命，犧牲了我一人的幸福，去充當嚮導女，更兼職舞女，因而變為賣淫的人，被社會輕視，最下賤的人。可是我需要掙扎，跳出我的火坑」「信箱欄目」，《女聲》第2卷4期，女聲雜誌社，1943，p.61
46. 原文「我們非常同情你，並且也很尊敬你，你雖然被一般人看作是墮落而被人輕視的女人，但是你有個許多人所不及的高尚純潔的靈魂，和一顆光明向上而勇敢的心。走在現在的路決不是你的過錯，你不是慕着虛繁，不是為着享樂，你是由於生活的逼迫，為着生存的競爭的！我們很能了解你的痛苦，也很希望幫助你走一條很好的道路。不過目前的情形很困難，本埠有幾個義務補習學校，但都是為着工人兒童和女工的。因此我們希望看見你，當面跟你談一談，也許臨時可以想一點辦法。同時我們認為你的遭遇離奇，生活經驗豐富，跟你談話對我們也是很有利的。你願意告訴我們你的地

址嗎？祝好！」「信箱欄目」，《女聲》，女聲雜誌社第2卷4期，1943，p.61

47. 原文「歌舞妓女雖是社會上的一種可憐的婦女，但是她們的職業只是使人消耗，與社會生產沒有關係」「信箱欄目」，《女聲》第3卷5期，女聲雜誌社，1944，p.37
48. 原文「這就是說，農村婦女，女工，女教員，女職員，以及其他其他的勞動（包括腦力和體力勞動）婦女，因為這些婦女才是社會的中堅，沒有她們，整個社會生產，整個民生問題和文化教育都要發生影響」「信箱欄目」，《女聲》第3卷5期，女聲雜誌社，1944，p.37
49. 原文「一批有利於社會的婦女們」「信箱欄目」，《女聲》第3卷5期，女聲雜誌社，1942，p.37
50. 原文「結婚與到社會去服務兩件都是不可少的事，第一件是要聽從自然規律的，第二件是要為社會設想的，因為婦女也是社會國家的一份子，應該有獨立的事業與活動，然而在目前社會中這兩件事卻時時在那裏衝突，這一件事可以阻礙那一件」「信箱欄目」，《女聲》第1卷9期，女聲雜誌社，1942，p.47
51. 原文「我們把問題分作兩方面，一方面從社會職業上去看，另一方面從家庭制度上去看」「信箱欄目」，《女聲》第1卷9期，女聲雜誌社，1942，p.47
52. 原文「只有一個辦法，你一方面努力你學習的東西，使自己有一種好的成就。——因為有特殊技能的人容易與社會努力奮鬥——其次便是找一個瞭解你，尊重你，而能贊助你的社會活動的丈夫」「信箱欄目」，《女聲》第1卷9期，女聲雜誌社，1942，p.47
53. 江上幸子「抗戰期の辺区における中国共産党の女性運動とその方針転換——雑誌『中国婦女』を中心に——」《中国の伝統社会と家族》汲古書院，1993，p.530
54. 漱六「七年来的上海雜誌事業（下）」《文友》第3卷第3期，1944，p.16-17
55. 魯西「三論」《文友》第5卷第1期，1945，p.11

（都市イノベーション学府博士後期課程・都市イノベーション専攻）

The Analysis of Women in the “*Female Voice*” Magazine during the Japanese Occupied Area

Its Publicity of Collaborations and Other Relevant Issues

Yilin Duan

The magazine *Female Voice* was published and issued by Japanese Army support in the Japanese occupied area Shanghai in 1940s. The magazine didn't serve very well as a useful tool to lessen the cultural misconceptions, although it was sponsored by the Japanese Army. The magazine apparently seems to be very harmonious integrated in which the chief editor, Toshiko Sato, using the contributors and the complier Guan Lu using comments aired their own opinions on women in general.

At that time, Zhou Zuoren, who worked actively in the enemy occupied area Beijing, expressed his views on “*Women and Reading*” in the magazine “*Female Voice*”.

Zhou Zuoren quoted some words like understanding wife and loving mother from Akiko Yosano's passage in *Hitosumiyori* which could superficially be interpreted as the mainstream ideology in the enemy occupied area. However, as a matter of fact, what Zhou indicated was the idea of the women's perspective of female enjoying the same rights as male in a family. Zhou emphasized more on improving women's quality on their own while being negative about women stepping into society.

Even though *Women and Reading* was issued in *Female Voice* at its front pages, the magazine did not comment on it at all.

The magazine advocated women to put to take part in the community and to focus on the important relationship between women and society. And it also encouraged women to learn essential skills in order to be financially independent which exactly matched with the school of thought for women advocated by the *Communist Party* in Yan'an.

This paper takes the perspective from *Women and Reading* to make comparisons between Zhou Zuoren's views on women and those on *Female Voice* in order to have a brief idea of the characteristics of the magazine.